World's Famous Classics

23

嵐が丘 詩

ンテ／工藤昭雄訳

世界文学全集——23

E・ブロンテ

1974年9月18日第1刷発行
1981年10月15日第2刷発行

定価　980円

訳者　工藤昭雄

発行者　三木 章

発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話　東京 03(945)1111(大代表)

振替　東京 8-3930

製版所　まゆら印刷株式会社

印刷所　豊国オフセット株式会社

製本所　株式会社国宝社

© KODANSHA 1974 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えします。

0397-410233-2253 (1)　(翻)

目次

嵐が丘……工藤昭雄訳 5
詩……工藤昭雄訳 367
解説　作品について……工藤　昭雄 432
　エミリとブロンテ家の人たち……鈴木　寧 438
参考文献……鈴木　寧 437
年譜……鈴木　寧 445

写真撮影＝小野寺健／篠塚純子／室谷洋三

装幀＝アド・ファイブ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

『嵐が丘』主な登場人物

ロックウッド――都会の騒々しさを逃れて、嵐が丘にやって来たスラッシュクロス屋敷の借家人。

エレン・ディーン（ネリー）――アーンショー家、リントン家に仕えた忠実な家政婦。この物語の語り手。

ヒースクリフ――幼いとき、アーンショー氏に拾われてヒンドリー、キャサリンと共に育つ。復讐と激しい愛に燃える本編の主人公。

ヒンドリー・アーンショー――嵐が丘の主人。ヒースクリフに復讐されながら、アル中になって堕落する。

フランシス・メアリー――ヒンドリーの妻。

ヘアトン・アーンショー――ヒンドリー夫妻の息子。

キャサリン・アーンショー――ヒンドリーの妹。エドガーの妻になるが、ヒースクリフとの宿命的なつながりを知る。

エドガー・リントン――スラッシュクロス屋敷の主人。妻キャサリンにおだやかな愛情をそそぐ。

キャサリン・リントン――エドガー夫妻の娘。ヒースクリフの息子と結婚するが、のちにヘアトンと結婚。

イザベラ・リントン――エドガーの妹。ヒースクリフと結婚。彼の虐待を逃れて、病弱なリントンを生む。

リントン・ヒースクリフ――ヒースクリフ夫妻の息子。

ジョウゼフ――嵐が丘の召使じいさん。

嵐が丘

第一章

一八〇一年――

家主を訪ねて、いま戻ってきたところだ――これからさき、つきあわなければならないただ一人の隣人である。たしかにここは、美しい土地だ。イギリスのどこをさがしても、これほど完全にさわがしい世間からかけ離れた場所があるとは思われない。人間ぎらいにとってまさしく天国である。そのうえ、ヒースクリフ氏は、このわびしさを分かちあうにはおあつらえ向きの相棒ときている。いい相手がいてくれたものだ！　ぼくが馬で乗りつけると、あの男はいかにも、うさんくさそうに眉をよせて黒い目をひっこめ、こちらが名のると、握手はごめんとばかり、チョッキにつっこんでいた手をなおさら深く隠したのである。それを見てぼくは、あつい親近感をおぼえたのだが、彼のほうではそんなこととは想像もつかなかっただろう。

「ヒースクリフさんですね？」とぼくはいった。

ひとつうなずいたのが返事だった。

「こんどお屋敷をお借りすることになったロックウッドです。スラッシュクロス屋敷をぜひお借りしたいなどとわがままを申しまして、ご迷惑ではなかったかと、おわびかたがた着くなりさっそくお伺いしたしだいです。昨日耳にしたところでは、いろいろお考えもあったそうで――」

「スラッシュクロスはわしの屋敷なんだからね」彼はうるさそうにぼくの言葉をさえぎった。「しようがない場合ならべつだが、わしの迷惑になるようなことはだれにもさせやしない――はいんなさい！」

この『はいんなさい』がまた、ろくに口をあけずにいうものだから、（くたばりやがれ）と思っているように聞こえる。しかもそういっておきながら、彼は門にもたれかかったままいっこうにあけようとしないのだ。そんなわけでぼくも、ご招待どおり意地でもはいってみせるぞ、という気をおこしたのである。ぼくに輪をかけて無愛想なこの男に興味をおぼえたのだ。

ぼくの馬が胸で門の扉を押しあけようとするのを見て、ようやく彼はチョッキから手を出して鎖をはずし、むっつりしたまま盛り土した道を先に立って歩いて行ったのだが、中庭へはいると、「ジョウゼフ、ロックウッドさんの馬を連れていけ。それからぶどう酒をもってこい」とどなった。

このように二つの用事をいっしょくたにいいつけると

ころをみると、どうやらこの家には召使が一人しかいないらしい、とぼくは思った。道理で敷石のあいだには草が生えているし、生け垣も、牛に嚙みちぎられているだけで、手入れができていない。

ジョウゼフというのは、かなりの年輩の、というより、もう老人だった。たくましく、鬘（かつら）としているけれども、おそらく相当の年なのだろう。彼はぼくから馬をうけとりながら、「神さま、お助けくだされ」といまいましそうにつぶやき、その間、にが虫を嚙みつぶしたような顔でこっちをにらみつけていた。これはきっと昼めしのこなれがよくなるよう神さまにおたのみしているので、ぼくが不意にやってきたのをこぼしているわけではあるまい、と善意に解釈することにした。

『嵐が丘（ワザリング・ハイツ）』というのがヒースクリフ氏の住居の名である。『ワザリング』とは、大気の荒れ狂うさまをたくみに形容したこの地方独特の言葉で、嵐になると、この家は位置の関係からそれをまともに受けるのだ。たしかにここでは身のひきしまる、すがすがしい風が年じゅう吹いているにちがいない。屋敷の端に生えている数本のいじけたもみの木がひどく傾いているのを見ても、また、立ち並ぶやせこけたさんざしが、太陽の恵みを乞うかのように、同じ方向へ枝をさしのばしているのを見ても、北風の強さが推察できるだろう。さいわい建築師もその辺は見ぬいていたものと見えて、家はがっしりとできていた。窓は壁の奥深くに小さく切ってあり、家の隅は大きな張り出した石で固められていた。

敷居をまたごうとしてぼくは、家の正面、ことに玄関の扉のあたりにいっぱい彫りつけられた奇怪な彫刻に見とれて、足をとめた。扉の上のほうには、くずれかかった怪獣グリフィンや素裸の童子たちのむらがる中に、『一五〇〇年』という年号と、『ヘアトン・アーンショー』という名前とが読みとれた。ぼくとしては二、三感想でも述べてみて、ぶっちょうづらの主人からこの屋敷の来歴について概略でも聞き出したいと思ったのだが、相手は戸口で、さっさとはいるか、さもなければとっとと帰れ、という態度を見せている。まだ奥の院を拝見してもいないのに、これいじょう主人をいらいらさせるのはまずい、と考えてそれはあきらめることにした。

一歩なかへはいると、控えの間も廊下もなくていきなり茶の間になっていた。こうした部屋のことをこの辺ではもっぱら『うち』と呼んでいる。ふつうは台所も居間もふくまれているのだが、この『嵐が丘』では、台所はべつのところへ追いやられているらしい。すくなくとも、人の話し声や台所道具の音はずっと奥のほうから聞こえてきたし、大きな炉のあたりにも、ものをあぶったり、煮たり、焼いたりした跡がない。また壁にも銅のシ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

チューなべや錫の濾過器などが光っていなかった。もっとも、部屋の片隅には大きなかし材の食器戸棚があり、その上に銀の水さしや大杯などをまじえて天井まで積みかさねられた白鑞の大皿は、炉の光と熱とを受けてぎらぎら光っていた。天井といっても、最初から板なぞ張ったことはないらしく、からす麦のパンや牛のもも肉、羊肉、ハムなどをつるした部分をのぞいて、屋根裏の骨組みがまる見えだった。炉の上には、いろんなうす汚い古鉄砲や二挺の騎馬用ピストルがかかっていた。そして、飾りのつもりであろうか、けばけばしい色をした茶の罐が三つ、炉棚にならべられていた。床にはなめらかな白い石が敷かれ、いすは背の高い古風な形で、緑色に塗られていた。重そうな黒いいすも一、二脚、隅の暗がりにおかれている。食器戸棚の下のくぼみには、大きなこげ茶色の牝のポインターが、くんくん鳴く仔犬たちにかこまれて寝そべっていた。ほかにも何頭かの犬がいて、それぞれ隅に陣どっていた。

こうした部屋のたたずまいや家具は、がんこそうな顔つきの、半ズボンやゲートルのよく似あうたくましい脚をもった、素朴な北国の農民の家で見かけるものとすこしも変わりはなかった。食後、ころあいを見はからって行けば、この丘陵地帯五、六マイルのどこででも、そうした男が丸テーブルの上の泡立つビールのジョッキを前にして、ひじかけいすに腰をおろしているのが見られるだろう。ところが、ヒースクリフ氏にはそうした住居や暮らしむきと妙につりあわないところがある。色が浅黒くてジプシーみたいに見えるのだが、身なりも態度も紳士である。といっても、その辺にざらにいる田舎紳士の程度ではあるのだが。どちらかといえば、だらしのない紳士のほうかもしれない。しかし、姿勢のいいりっぱな体つきをしているので、身なりをかまわないのがそれほどへんには見えない。だが、それにしても気むずかしそうな男である。人によっては、下品で高慢なやつだと思うかもしれないが、彼にたいしてひそかに共鳴するところがあるせいか、ぼくにはそんなふうには考えられない。彼がむっつりしているのは、感情をことさらにひけらかし、好意を見せあうことをきらっているからなのだ、ということをぼくは直感的に理解した。彼は、愛や憎しみを自分ひとりの胸のなかに包み隠し、他人が彼を愛したり憎んだりするのを出すぎたことだと考えているらしい。いや、これはぼくが早まりすぎたようだ。自分の性質をむやみに彼にあてはめてしまっている。ヒースクリフ氏が一方的に交際をもとめてくるものを敬遠するのは、ぼくとはまったくちがった理由のためかもしれない。どうやら、ぼくの性格もだいぶ変わっているようだ。おまえには快適な家庭はつくれない、と母がよく

いっていたものだが、げんにこの夏、もののみごとにそれを実証してしまったのである。

好天に恵まれた海岸で一ヵ月ばかりすごしているあいだに、ぼくは、世にも魅力的な女性にめぐりあったのだ。先方がまだこちらを気にもとめていなかったあいだは、彼女の姿はぼくの目にまさに女神のごとくうつった。口に出して『胸の想いをうちあけることはけっしてしなかった』が、それでももし目が口ほどにものをいうものならば、ぼくが首ったけになっていることは、どんな間抜けにもわかったはずである。やがてとうとう彼女にもこちらの気持ちがわかり、やさしいまなざしを――たとえようもなく愛らしいまなざしを送り返してくれるようになった。ところでぼくはどうしたか？　恥をしのんで白状すると、かたつむりのように自分の殻のなかへ逃げこみ、彼女のまなざしを受けるたびにますます冷たくよそよそしい態度をとったのだ。こうしてしまいに、このうぶなお嬢さんはかわいそうにも自分の勘ちがいだったと思うようになり、どうしたらよいものやらわからなくなってしまい、母親を説きつけて海岸をひきあげてしまったのである。こういう変わった性分のおかげで、ぼくは、わざと冷酷な仕打ちをする男という評判をとってしまったが、それがどんなに不当なものであるか、ぼくだけにはよくわかっている。

この家の主人が暖炉の一方の端へ歩みよったので、ぼくはその反対端に腰をおろし、沈黙の気まずさをまぎらすために、親犬の頭をなでてやろうとした。この親犬は、いつの間にか仔犬たちのそばをはなれ、よだれをためた白い歯をむきだし、いまにも食らいつきそうな様子で、狼のようにぼくの脚のうしろにしのび寄っていたのだ。なでてやると、ひと声のどの奥から長いうなり声をあげた。

「そいつにはかまわんほうがいい」とヒースクリフ氏もいっしょにそううなると、犬がそれいじょういきりたってこないよう足で一発けとばした。「こいつは甘やかされたことなんかないものだからね――おもちゃに飼ってあるわけじゃないから」そういうと、わきの戸口へ大またで歩いていき、また「ジョウゼフ！」とどなった。

ジョウゼフは地下室の奥でなにやらぶつぶついっていて、あがってくる気配はいっこうに見せなかった。そこで主人のほうから下へおりていき、あとに残されたぼくは、どう猛な牝犬と、これまた怖い顔つきでぼくの一挙一動をゆだんなく見張っている二匹の毛むくじゃらの牧羊犬と顔をつきあわせていなければならなかった。やつらの牙にかけられるのはありがたくなかったので、ぼくはじっとしていたのだが、声にさえ出さなければ少々からかってもわかりはすまいと思ったので、この三匹にむ

かって、目くばせしたりしかめっつらをしてみせたのが運のつきというわけで、いろいろやってみせた顔つきのどれかがひどく牝犬の気にさわったとみえて、そいつが突然怒りだし、ぼくの膝にとびかかってきた。ぼくはそれを突きとばしておいて、あわててテーブルの向こう側へまわった。これがきっかけで蜂の巣をつついたような騒ぎになった。大きいのや小さいの、年とったやつや若いやつをとりまぜて、五、六匹の四つ足の悪鬼が、それぞれの隠れ家からいずれも部屋の真ん中へとび出してきた。かかとと上着のすそをとくに狙っているようだった。火かき棒で大きいやつの攻撃をどうにかかわしたものの、どうにもやりきれなくなり、この騒ぎをとりしずめてくれるよう大声をあげて家の人に助けをもとめなければならなかった。

ヒースクリフ氏と下男は、しゃくにさわるほどおちつきはらって、地下室の階段をあがってきた。暖炉のまわりでは噛みついたり吠えたりの大騒ぎだというのに、ふだんよりすこしでも急ぐ様子は見せなかった。さいわい、台所からいち早くかけつけてくれた人がいた。元気のいい女で、服のすそをはしょり、腕まくりし、火にほてったまっ赤な顔をして、フライパンをふりかざしながら、騒ぎのまっただ中へとびこんできてくれた。彼女がこの武器をふるい、どなってくれたおかげで、嵐は魔法にかかったようにしずまり、主人がそこへやってきたときには、彼女だけが、強風のあとの海のように胸を波うたせていた。

「いったいどうしたんです？」と主人はぼくのほうをじろりと見ていったが、さんざんな虐待をうけたあげくこんなふうににらみつけられては、さすがにぼくも我慢がならなかった。

「どうしたもくそもあるもんか、まったく！」とぼくはつぶやいた。「悪魔にとりつかれた豚だって、お宅の犬よりまだたちがいいくらいのもんだ。これじゃまるで客を虎の群れのなかへほうりこむのと変わりないじゃないですか！」

「手出ししない人には何もしないはずですがね」と彼はいって、ぼくの前にぶどう酒のびんを置き、テーブルをもとの位置になおした。「警戒するのは犬のつとめですからな。ところで、一杯どうです？」

「いや、けっこう」

「噛まれはしなかったんでしょう？」

「噛んだりしようものなら、火かき棒の跡ぐらいつけずにおくもんですか」

ヒースクリフ氏は顔をほころばせて、にやりと笑った。

「まあまあ、そうむきにならないで、ロックウッドさ

ん。どうです、ちょっと飲みませんか。うちじゃめったにお客がないもんだから、正直いって、わたしも犬のやつらも、お客をどうもてなしたらいいのかわからんのですよ。じゃ、あなたの健康を祝して！」

ぼくは一礼し、乾杯をかえした。たかがやくざ犬どもに吠えつかれたからといって、いつまでもふくれっつらをしているのもおとなげない、と思いはじめたのだ。それに、これいじょうやつのお笑いぐさにされるのもいまいましい。どうやらやつはそんな気分になっているらしいから。彼のほうでも——おそらく、せっかくの借家人の感情を害するのは得策ではないと思い返したのであろう——代名詞も助動詞も切りおとしたようなぶっきらぼうな口のきき方をいくらかあらためて、ぼくが興味をもちそうな話題、つまりこんどぼくが隠棲の場としてえらんだ屋敷の長所、短所について話しはじめた。彼は、ぼくたちのふれた問題については、なかなか頭のきれるところをみせた。そこでぼくは、まだひきあげもしないうちから、よし明日も押しかけてこようという気になっていた。彼がそれを望んでいないのは明らかだった。しかしそれでもぼくは訪ねるつもりだ。あの男にくらべると、ぼくのほうがまだしも社交的に思えてくるのだから、ふしぎなものだ。

第二章

昨日は午後から霧が立ちこめ肌寒かった。ぼくは、荒野とぬかるみを越えて嵐が丘まで出かけていくのをやめて、書斎の火のそばですごそうかとも思った。ところが、正餐をすませて（というのは、ぼくの正餐は十二時と一時のあいだということになっているからである。家を借りるさいにそなえつけの備品みたいにいっしょに雇うことになった世話好きな家政婦には、正餐は五時にしてくれというぼくの要求がのみこめず、またわかろうともしてくれなかったのだ）のんびりくつろぐつもりで階段をあがり、書斎へ足をふみいれると、女中が、ブラシや石炭入れにとりかこまれて膝をつき、燃えがらをどさりとかけて火を消し、ものすごい灰かぐらを立てているところだった。これを見てぼくはすぐさま退散した。帽子をかぶり、四マイルの道のりを歩いてようやくヒースクリフ氏の庭の門までたどりついたのだが、ちょうどそのとき吹雪の前ぶれがちらつきはじめ、途中で降られるのはかろうじてまぬがれることができた。

この吹きさらしの丘の上では、土が黒霜でかたく凍て

つき、冷たい風のために体じゅうがふるえあがった。門の鎖がはずれないのでとびこえ、両側にすぐりの生え茂った盛り土道の石畳をかけ、玄関の扉をたたいたが、だれもあけてくれるものがなく、しまいにはこぶしが痛くなり、犬まで吠えだすしまつだった。

「しようのない連中だ！」とぼくは心のなかでさけんだ。〈こんな無愛想な客あしらいをしているんじゃ、いつまでも世間から相手にされなくなったってあたりまえだぜ。すくなくとも、ぼくだったら昼間から扉のかんぬきをおろすなんてまねはしやしない。かまうものか――はいってやれ！〉そう腹をきめて、ぼくは、かけがねをつかんで激しくゆさぶった。しぶい顔をしたジョウゼフが、納屋の丸窓から首をつき出した。

「なにか用ですかい？」彼はさけんだ。「だんななら羊小屋にいなさるだ。話があるんなら、納屋のはじをまわっていきなせえ」

「うちの中には戸をあけてくれるものがいないのかね？」ぼくはどなり返した。

「若奥さましかいなさらねえだ。おめえさま、夜までそんなものすげえ音をたてなすっても、あけてくださる気づかいはねえだよ」

「どうしてだ？　おまえがとりついでくれたらどうなんだ？　え、ジョウゼフ」

「いやなこった！　わしの知ったことじゃねえ」とつぶやいて、じいさんは首をひっこめてしまった。

雪は激しく吹きつけはじめた。ぼくはもう一度やってみようと思い、とっ手をつかんだ。そのとき、上着も着ないで熊手をかついだ若い男が、裏庭にあらわれた。ついて来いといわれるままに男のあとにつづいて洗濯場を通りぬけ、石炭置き場やポンプや鳩舎のある石畳を通っていくと、やがて昨日通された、ひろい、暖かい、居心地のよい部屋へ出た。石炭や泥炭や薪をいっしょにくべた大きな火の明かりで、部屋じゅうが気持ちよく輝いていた。盛りだくさんの夕食をならべたテーブルのそばに、『若奥さん』が、そんな人がいようとは思ってもみなかった女性が、すわっているのを見て、ぼくはすっかりうれしくなった。ぼくは会釈をして、お掛けなさいといってくれるだろうと思い、待っていた。ところが、彼女は、いすにもたれてぼくを見つめているだけで、身じろぎもしなければ口もきかない。

「ひどい天気ですね！」とぼくはいってみた。「奥さん、おたくみたいに召使がのんびりしていちゃ、戸もたまったもんじゃありませんね。いくらたたいても聞こえないらしく、ぼくもえらく苦労しましたよ」

彼女は口を開こうともしない。ぼくはじっとその顔を見つめた――相手も見つめ返す。とにかく、ひややか

な、よそよそしい目つきで見つめられているものだから、ぼくはすっかりまごつき、不愉快になった。

「かけなよ」と若い男がぶっきらぼうにいった。「じきに帰ってくるからよ」

ぼくはいわれたとおり腰をかけ、咳ばらいをしてから猛犬のジューノウを呼んだ。二度目の対面のせいかぼくを知っているというしるしにしっぽの先をそれでもちょっぴり振ってくれた。

「みごとな犬ですね！」とぼくはまた話しかけてみた。

「仔犬はよそへやるおつもりですか？　奥さん」

「あたしのじゃありませんから」この愛らしい女主人のつっけんどんな返答ぶりはまさにヒースクリフ以上だった。

「それじゃ、奥さんのお気にいりはこちらのほうですかな？」ぼくは、猫のようなものがいっぱいのっている暗がりのクッションのほうを向いて、言葉をつづけた。

「そんなへんなものをお気にいりだなんて！」彼女はばかにしきったようにいった。

あいにく、それは山積みにされた死んだ兎だったのだ。ぼくはもう一度咳ばらいをして、暖炉の近くへいすをひきよせ、夕暮れの荒れた天候について感想をくりかえした。

「こんな日にお出かけになるのがまちがいよ」と彼女は、いって立ちあがり、炉棚から色塗りの茶の罐を二つとろうとした。

それまで彼女の位置は暗がりになっていたが、いまはじめて彼女の全身と顔をはっきりと見ることができた。ほっそりとしていて、まだ少女らしさがぬけきっていないように思われた。その姿はとても美しく、顔は見たこともないくらいきりょうがよく、かわいらしい。目鼻立ちは小ぢんまりとしていて、とても色が白い。亜麻色の、というより金色の巻き毛がなよやかなうなじにふんわりと流れている。そして目は、もしもやさしい表情さえやどっていたら、たまらないほど魅力的だったろう。だがほれっぽいぼくにとってさいわいなことに、その目にあらわれていたものは、そんな美しい目にはおよそ似つかわしからぬ、侮蔑と捨てばちのあいだをさまよっている感情だった。

彼女の手が茶の罐までとどきそうになかったので、ぼくは手を貸そうとした。すると彼女は、金勘定をしている守銭奴が手伝ってやろうとひとからいわれたときのように、ぼくのほうに向きなおった。

「お手伝いはけっこうよ」と彼女は噛みつくようにいった。「自分で取れます」

「こりゃどうも」ぼくはあわてて答えた。

「お茶にお招びしてあったのかしら？」小ざっぱりした黒い服にエプロンをかけ、ポットにお茶をひとさじ入れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo